

腫瘍内科

■ スタッフ（項目見出しスタイル）

科長	片山直之	
副科長	水野聡朗	
医師数	常勤	2名
	併任	3名
	非常勤	0名

■ 診療科の特色・診療対象疾患

1. 腫瘍内科とは

がんに対する治療には、外科治療、薬物療法、放射線治療、内視鏡的治療などがあります。腫瘍内科とは、化学療法などを含むがん薬物療法を専門的に行う診療科です。腫瘍内科の主な役割については、下記のようにまとめることができます。

1. 各がん種に対して、根拠（エビデンス）に基づいた標準的治療の実践
2. 個別化治療の実践：病気の種類・性質・進行度などに応じ、個々の患者さんに最も適した治療を提供する。
3. 生活の質（Quality of Life：QOL）の改善：腫瘍関連症状や化学療法の副作用の軽減に努める。
4. 治療相談：専門外来、セカンド・オピニオン等を通じて標準的治療に関する相談のほか、臨床試験等の情報提供を行う。
5. 新規治療の開発：臨床試験、トランスレーショナルリサーチを実践し、新しい治療法の研究開発を行う。

2. 主な診療対象疾患

- ・乳癌
薬物療法は、乳癌においてはますます重要な存在となってきました。早期例、進行例など病期に応じて下記のような薬物治療を実践しています。
- ・乳房温存などを目的とした術前化学療法
- ・再発予防を目的とした手術後の薬物療法
- ・転移再発乳がんに対する薬物療法
- ・消化管腫瘍(胃癌、食道癌、大腸癌)
当科では、切除不能な進行例に対して化学療法を

実施しています。また食道癌におきまして、放射線治療科との連携により化学放射線治療も実施しております。

- ・原発不明癌
発症頻度は10%未満と少ないものの、診断・治療方針に難渋する場合があります。薬物療法においては、腫瘍の性質に応じた薬剤選択により治療効果の向上に努めております。

- ・胚細胞腫瘍(性腺外)
進行例であっても適切な化学療法とそれに続く手術により治癒が期待できる腫瘍であり、外科(泌尿器科、胸部外科)とも緊密に連携して、当科でも積極的に取り組んでいます。

- ・成人軟部腫瘍
この領域において新規抗癌剤が導入され、薬物療法の選択肢・役割も以前よりましています。整形外科等と共同で治験含めた薬物療法実践しています。

■ 診療体制と実績

我々のグループでは、がん薬物療法専門医を含むスタッフが診療・研究に従事しております。三重県下にはがん薬物療法専門医が12名しかおりませんが、そのうち4名(1名留学中)が当科に所属しております。いずれのがん種においても、他の診療科と緊密に連携して、病期に応じて手術・薬物療法・放射線療法を含む集学的治療を実施しております。

特に、当科で最も患者数が多い乳癌においては、乳腺センターと放射線治療科と連携し、病期・腫瘍の性状に応じて化学療法、内分泌療法、分子標的治療薬などの薬物治療を実践しています。

■ 診療内容の特色と治療実績

化学療法を含む薬物療法は、QOLの観点からも現在多くが外来治療として実施されております。

当科の昨年1年間の外化学療法件数は2000件を超えております。病院全体の外来化学療法件数の約3分の1を当科が実施していることとなります。

化学療法を外来で安全に実施するためには、副作用管理が非常に重要になります。当科では副作用の管理において独自の取り組みにより、より安全でQOLの高い外来治療の提供を目指しています。


■ 臨床研究等の実績

臨床研究としては、下記の4つに集約されます。

- ① 新たな標準的治療開発のための多施設共同研究への参加
- ② 化学療法に伴う副作用についての研究
- ③ 新たな治療開発のためのトランスレーショナル研究
- ④ 稀な腫瘍に対する治療の開発

昨年度は、主に②に関する研究成果を国内外の学会にて公表しました。

原発不明癌などのまれな腫瘍においては、臨床試験の実施が難しいため、標準的治療法がまだ確立されておりません。当科では、このような腫瘍に対してもスポットをあて、トランスレーショナルリサーチを通じて、新たな治療開発を行っています。

 <http://www.hosp.mie-u.ac.jp/> (ホームページ)